■ 書 評 ■

小山保郎著『小学校社会科・地理的学習の理論と実際』（東洋館出版社，昭和57年）

朝 倉 隆太郎

著者は，本書の出版された昭和５７年４月，筑波大学附属小学校を退官され，現在，国学院大学栃木短期大学で教鞭をとっておられる。著者が附属小学校に奉職されたのは，東京高等師範学校附属小学校と呼ばれていた時代であり，爾来３０年余の長きにわたって，名実共に教育の大本山であった教員養成大学附属小学校において，小学校地理教育の指導発展に寄与した著者の功績は極めて大きい。そうした著者が，附属小学校を去るに当たってまとめられた一つの決算書が本書であるといえよう。

「はしがき」の中で著者は，次のように述べている。すなわち，小学校の教師は誰でもが社会科の授業を否応なしに担当しなければならないのであるから，これからの社会科教育の発展を考えた場合，「先生方だれでもが気軽に，意欲的に，しかも自信をもって日々の社会科の授業に臨むといった，底辺の活動をさかんにし，活発にすることが大切です。」と。

本書の内容は，理論編，技能編，実践編の３編から構成されているが，上記のように「日々の授業にできるだけすぐ役立てることができるように」との配慮から，技能編と実践編に重点が置かれている。事実，著者の経歴からも分かるように，小学校・地理教育の技能面と実践面とは，まさに著者の独壇場である。

技能編である「Ⅱ 社会科学習を深める地理技能」は，一 社会科における技能（1.社会科学習における能力，2.地理的な技能，3.地図の読み方，描き方，4.地図についての初歩的指導，5.地図作業のさせ方），二 社会科学習における観察のさせ方，三 視聴覚教材の取り扱い方，四 略地図の描き方とその利用，五 地理模型の作り方，六 統計の図化と利用法，七 地名を興味深く覚えきる方法，八 地図指導内容の系統表の８節から成る。どんなに高尚な社会科教育論や地理教育論を述べても，それだけで児童は成長するものではない。児童の成長に直結するのは，地理指導における教師の地理的技能である。

著者の体験に裏づけられた叙述には敬服させられる。例えば，略地図を早く，うまくかけるようになるためには，①原図をなぞる練習，②かき始めを決めておく，③一筆がき，④もとの地域の地形に注意して書くことが，その要諦であると述べてある。

実践編である「Ⅱ地理的学習の展開」は，一　社会科指導計画と地理的学習，二　各学年での地理的学習とその評価，三　地理学習とその評価の3章からなり，第二章が詳しい。

理論編である「Ⅰ社会科と地理学習」の叙述は簡潔であるが，要点を的確に述べてあり，特に「地理的意識とその発達」は理論編の中の珠玉である。　（筑波大学教育学系教授）

■ 書　評 ■

石山忠造著『小学校社会科教育法』(図書文化社，昭55年)

横　山　十四男

著者の石山忠造先生は，35年にわたって筑波大学附属小学校で教鞭をとられ，今年3月定年退官されてからも，昭和女子大学で社会科教育関係の講義を担当しておられる方である。本書の構成は，

第1章　社会科誕生の意味とその変遷

第2章　社会科の目標と内容

第3章　子供の発達傾向と能力の考察

第4章　地域の実態に即した「社会科の教育課程」

第5章　低学年の学習指導法

第6章　中学年の学習指導法

第7章　高学年の学習指導法

第8章　学習指導法の原理と創造

第9章　社会科の評価と指導

以上の通りであるが，「まえがき」で著者自身が言っておられるように，この本の重点は第5章～第8章に置かれている。小学校の低・中・高の各学年の社会科学習に関するきめ細かな実践事例が，豊富に納められている第5章～第7章と，それらをふまえながら，学習指導法の諸原理を総括したうえ，独自の学習指導法の創造を提唱しておられる第8章の内容は，まさに35年の経験を持たれるベテラン教師ならではの感を深くするものである。

「人間には"好み"というものがある。民間研究諸団体が主張する主義に対して，"好意"を